

9世紀における観世音寺と北部九州の造像をめぐる一考察

博士課程 宮田太樹

本発表は文献史料を主たる考察の対象とし、9世紀における観世音寺と北部九州の造像との関係性を具体的に検証することを目的とするものである。

当該期の北部九州の造像に観世音寺が深く関わっていたことは、多くの指摘があるものの、その具体的な役割については意見の一致を見ているとは言いがたい。そこで、本発表では「観世音寺講師」の事跡を考察することで、近年明らかにされつつある仏像の造形の変遷を歴史的に跡付けることを試みたい。

まず、注目するのは福岡県鞍手郡長谷寺に伝来する十一面観音菩薩立像である。本像は、面相部や板光背の意匠が和歌山・慈尊院の弥勒仏坐像（寛平4年：892）と通じることから、同時期の9世紀末頃の制作と考えられている。

慈尊院像は、奈良時代に流行した独特の偏袒右肩（腹前を渡る衣を二段に折り返す）を採用している点、体軀の各パーツを分節的に捉える古様な立体把握を留める点などから、造東大寺所のような南都系の工房の関与が想定できる。従って、作風の近似する長谷寺像もやはり南都系の工人もしくは、その指導を受けた大宰府在地の工人の手によるものとみて大過ない。

このような南都風の造形と併せて、本像を特徴づけているのが、かねてより末吉武史氏が指摘してきた、腰帛の着用である。腰帛とは、腰以下をU字形に巡る天衣とは別の飾り帯で、平安時代の北部九州の菩薩像に数多く採用された在地様式とも言うべき表現である（末吉武史「北部九州の平安一木彫刻」『空海と九州のみほとけ』 2006年、「九州における古代木彫像の成立」『九州仏』 2014年）。

すなわち、長谷寺像は中央（南都）と在地（大宰府）の造形が共存している点に大きな特色がある。この内、前者は様式の問題であり、南都の工人が当地で造像を行うことがあったことを示唆している。そして、後者は図像の問題であり、仏像制作の際にあらかじめ腰帛の着用が指示されていた可能性を想定する必要がある。腰帛を着けた菩薩像が北部九州全域に展開していることを思えば、その命令主体はやはり大宰府・観世音寺であったとみるべきであろう。

上記を念頭におきながら、「凡大宰観音寺講読師者、預知管内諸国講読師所申之政」（『延喜式』玄蕃寮）と規定される観世音寺講師の事跡を検討する。発表者が特に注目するのは、天長（824～834）から承和（834～848）にかけて、恵運（798～869）が主導した一切経写経事業と、貞観年間（859～877）に道叡（生没年不詳）が行った観世音寺修理事業である。これらの検討を通して、観世音寺講師が仏像制作に際して、元となる図像の決定に大きな影響を及ぼしていたこと、また、造東大寺修理所のような南都の工人を大宰府周辺に派遣させることが出来る立場にあったことの2点を指摘する。

そして、長谷寺像、ひいては平安時代の北部九州の仏像制作に際して、工人の差配や図像の選定といった造形の本質に関わる部分において、観世音寺が強い影響力を持っていたことを主張したい。